

議事録：2026 年度 子ども理解活動I 最終発表・ディスカッション

日時: 2026 年 1 月 21 日 (水)

場所: 5101 教室

参加者: 3 年生履修学生、教員

教員体制:

- メイン司会・進行：玉置 先生
- 前半セッション補助：早矢仕 先生
- 後半セッション補助：林 先生

1. 概要

本セッションでは、各自が取り組んだ「子ども理解活動」について、前半・後半の 2 グループに分かれてディスカッションおよび代表者発表を行った。

玉置先生の進行のもと、学生の実践報告に対し、その場で教育的価値付け（意味付け）が行われたほか、林先生より「多様性の包摂」や「観察と判断」に関する専門的な指導・助言があった。

2. 前半セッション：代表者発表

進行・コメント：玉置先生

① 福井さん（運動チャレンジ聖徳プロジェクト）

- **活動:** 運動（特にマット運動・後転）が苦手な児童への指導。
- **実践:** 恐怖心を取り除くため、ゲーム形式を取り入れ、成功したら即座に「ハイタッチ」を行うスモールステップ指導を実施。
- **学び:** 運動を楽しむことが技術向上につながる。
- **玉置先生コメント:**
 - 「さりげなく言っているが、信頼関係構築のために自己開示を行っている点が重要」。
 - ハイタッチは単なるスキンシップではなく、即時的な「評価」として機能していた。

② 三浦 春菜さん（英語教室）

- **活動:** 英語読み聞かせ・ダンス（小 2～6 年混在）。
- **実践:** 指導者自身が楽しみ、ペア作りや環境設定（座席配置）を工夫。中・高学年の枠を超えた「自己選択」による参加を認めた。
- **学び:** 信頼関係（ラポール）の構築がすべての土台である。
- **玉置先生コメント:**

- 学年を分けず、子どもに選ばせた「自己選択」は教育の本質。自己選択させることで、子どもに責任感が生まれる。
- 準備が完璧でも、信頼関係がなければ成立しないことに気づいた点が素晴らしい。

③ 斎藤さん（ホームフレンド・不登校支援）

- **活動:** 不登校の小3 男子児童宅への訪問。
- **実践:** 当初は目も合わなかったが、「話しすぎると離れていく」と察し、聞き役に徹したり、ゲームを教えてもらう立場をとったりした。
- **成果:** 玄関での出迎えやフリースクールへの通学など、劇的な変化が見られた。
- **玉置先生コメント:**
 - 「話しすぎると離れる」という気づきは、不登校支援において非常に重要。焦らず時間をかけたことが、保護者や本人の喜びにつながった。

④ 稲垣さん（レクリエーション・カップの会）

- **活動:** 秋祭りでの輪投げブース運営。
- **実践:** 輪っかに「願い」を込めさせることで意欲を引き出した。活動が停滞した際、運営と相談し「ジャイアン」の仮装で登場し場を盛り上げた。
- **学び:** 子どもの願いを引き出すことが粘り強さにつながる。
- **玉置先生コメント:**
 - 単なる「遊び相手」で終わらず、子どもに目標を持たせ、挑戦させようとする教育的意図（成長への視点）が感じられた。

3. 後半セッション：代表者発表

進行：玉置先生

専門的助言：林先生（後半補助）

⑤ 鈴木 凜さん（名古屋市教職インターンシップ）

- **活動:** 小6 外国語科（自由進路学習）での支援。
- **課題:** グループに入れず孤立した女子児童への対応。
- **実践:** 児童の「邪魔になりたくない」という思いを受容。教員間で連携し、男子側・女子側双方の話を聞いて否定せずに橋渡しを行った。
- **玉置先生コメント:**
 - 「自由進路学習」において懸念される「子どもの孤独」に対し、教師がどう関わるかという、現在の教育現場で最も重要な課題を学んでいる。

⑥ 三木さん（学生ボランティア）

- **活動:** 小3 学習支援。

- **課題:** 学力が十分でない児童が、周囲と比較して「分かったふり」をしてしまう。
- **実践:** 個別学習の時間に一問ずつ丁寧に支援。「周りとは比べなくていい」環境を作り、心理的な安全性を確保した。
- **林先生による解説（多様性の包摂）:**
 - 次期学習指導要領のキーワード「多様性の包摂（インクルージョン）」の実践である。
 - 学力が低い子、高い子（吹きこぼれ）、外国籍、障害など、多様な子どもがいる中で、その子にとっての最善（ウェルビーイング）を作ることが教師の役割である。

⑦ 日比野さん（ぐんぐん隊）

- **活動:** 学内サークル活動（小1～3年生対象）。
- **実践:** 感情を抑えられず離脱する児童に対し、あえて注意せず見守ったところ、自分で戻ることができた。
- **学び:** 表面的な行動だけで叱らず、子どもの内面や葛藤を理解する重要性。
- **玉置先生コメント:**
 - 「楽しいからおいで」と呼んだ以上、悲しい思いをさせてはならない。その責任感の中で、子どもを「掴む（理解する）」ことを学んでいる。

⑧ 前村さん（なごやインターンシップ・いきき土曜日サポーター）

- **活動:** 特別な配慮を要する児童への支援（インターンシップ等）。
- **実践:** 身体的距離の近さや集中力欠如に対し、「どこまで指導し、どこまで配慮すべきか」迷いながら試行錯誤した。
- **学び:** 児童理解は一度で完成しない。適切な判断には「正しい知識」が必要。
- **玉置先生コメント:**
 - 目に見える姿と心の内は一致しないという深い学びを得ている。リスクを自覚しながらも、関わり続ける姿勢が尊い。

4. 総括・まとめ

林先生による総括（観察と判断）

後半セッション終了後、林先生より活動全体を通したフィードバックが行われた。

1. **観察から「判断」へ**
 - 学生に共通していたのは「子どもを観察する力」。しかし、観察するだけでは不十分である。
 - 観察結果に基づき、行動（褒める、指導する、見守るなど）に移すための「判断力」が教師には求められる。
2. **判断の根拠は「知識」**

- 的確な判断を下すためには、経験だけでなく、大学の講義で学ぶ「理論・知識」が不可欠である。
- 「子ども理解活動（経験）」と「大学の学び（知識）」がリンクして初めて、正しい判断力が身につく。

3. 3年生へのメッセージ

- 今回の経験を「大変だった」で終わらず、言語化して知識に落とし込めるかが、4年生以降の成長の分岐点となる。

閉会

- レポートの保管（「子ども理解活動Ⅱ」への接続）の指示
- アンケートへの回答

決定事項・ネクストステップ

- **レポートの活用:** 返却されたレポートを各自保管し、次年度の活動や「子ども理解活動Ⅱ」の学びに接続させる。
- **学びの統合:** 残りの学生生活において、「現場での観察・経験」と「大学での専門知識」を往還させ、教師としての判断力を養う。